

# 古イタリア語の直接疑問文の構造

鈴木信吾

## はじめに

本稿は、古イタリア語（13世紀～14世紀初頭のテキストによるトスカーナ方言）の疑問文のうち、主節で表される直接疑問文を取り上げ、部分的にであるにせよ、それがいかなる統語構造上、情報構造上の特徴をもっているかを解明しようとするものである。検討を進めてゆくうえで、とりわけ主語が動詞の前や後ろでもつ情報機能に着目したい。その手順としては、まず、統語的な観点から、疑問詞に対応する要素を答えとして求める部分疑問文の構造と、*si/no* による答えを求める全体疑問文の構造とを、現代イタリア語と比較しながら見てゆく（第1節）。次いで、古イタリア語の平叙文に目を転じ、筆者の行なってきたこれまでの検討ですでに得られている結果（Suzuki, 2009）を簡単に紹介し、平叙文の主語が、動詞との位置関係により、いかなる情報機能をもつことができるのかをまとめておく（第2節）。最後に、古イタリア語の疑問文にもどり、動詞のすぐ後に残された主語がもつ情報機能と、動詞の前に出た主語（を始めとする動詞の項や疑問詞）がもつ情報機能とを探り、それにより得られた結果を、平叙文の主語がそれぞれ同じ位置でもつ情報機能と比較してみたい（第3節）。

## 1. 現代イタリア語と古イタリア語における疑問文の統語的特徴

現代イタリア語の部分疑問文における表面上の主語の位置については、Lepschy & Lepschy (1981) が次のように述べている（引用箇所における例文には、本文の例文に連続させた番号を適宜つけてゆく）。

「[疑問詞を含む疑問文の] 主語は、ふつう文の最後（時に最初）に置かれ、疑問詞と動詞のあいだには来ない。

(1) a. *quanto costa la sciarpa?*

b. *la sciarpa quanto costa?*

(2) \**quanto la sciarpa costa?*」 (Lepschy & Lepschy, 1981, p. 114)。

古イタリア語においても、ちょうど(1)の a と b にそれぞれ匹敵するような語順をもつ疑問文を見つけることができる。

(3) a. *Chente [= come] fu la torta?* (N, p. 848 = LXII)

b. *Questo che diletto vi rende?* (N, p. 867 = LXXX)

(3)a, b に斜体で示した主語は、表面上、(1)a, b におけると同じ位置を占めているようにも見える。

一方、現代イタリア語の全体疑問文については、Lepschy & Lepschy (1981) は次のような指摘をしている。

「もし質問が疑問詞を含まないなら、疑問は、イタリア語ではふつう（他の多くの言語におけるような）倒置によってではなく、イントネーションによって示されるが、文最後のアクセントのある単語に上昇音調が現れる。この上昇音調は、倒置を伴った場合でも、同じ単語から動くことはない。

- (4) a. *tua sorella vuol venire?*  
b. *vuol venire tua sorella?*

(4)は、両者とも *venire* に上昇音調がある。もし疑問の音調が *sorella* にあれば、両者の文ともに『妹は来たがっているのかどうか』ではなく、『来たがっているのは妹かどうか』を尋ねることになる。さらに気をつけなければならないのは、倒置が(5)のような文を生じさせるのではなく、(4)bのように主語を文末に移動させるという点である。

- (5) \**vuole tua sorella venire?* (Lepschy & Lepschy, 1981, p. 114)。

古イタリア語でも、やはり(4)a, bに相当しそうな語順を見つけることが可能である。ただし、イントネーションを検証することは不可能なので、ここではこれを除外して考えざるを得ない。

- (6) a. *Alobroges è degno d'avere merito di ciò che manifestò la congiurazione di Catellina?* (R, p. 104 = XLIX 2)  
b. *Or muoiono tutti li uomini?* (M, p. 255 = CLXXIV)

(6)a, bに斜体で示した主語の位置も、(4)a, bと同位置にあるかのように見える。しかし、ここで気をつけなければいけないのは、Lepschy & Lepschy (1981) が、現代イタリア語における全体疑問文の倒置とは、一般に主語が文末に移って作られるものだ、と言っていることである (Seriani, 1991<sup>2</sup>, p. 520 はこれを主語と述語の倒置としている)。

ここで、古イタリア語の「倒置」に目をやると、主語は、それが名詞から成つていようと代名詞から成つていようと、むしろ定動詞のすぐ後に続くのがふつうであることに気づく。次の(7)a は人称代名詞、(7)b は名詞による例。

- (7) a. *Konosci tue questo cavaliere?* (T, p. 48 = XXVII)  
b. *È Giraldo degno di pena di ciò che commise furto?* (R, p. 104 = XLIX 2)

主語が定動詞の直後の位置を占めるということは、動詞が複合形をなすときにさらにはっきりする。

- (8) a. *Avete voi istanziato kolae ove [= stabilito dove] dee esser la battaglia?* (T, p. 36 = XVII)  
b. *Non potete Ligario avere di te buona speme [...]?* (L, p.182)

(8)a は人称代名詞、(8)b は名詞の主語であるが、いずれも動詞の定形 (a は助動詞 *avete*、b は補助動詞 *potete*) のすぐ後であると同時に、非定形 (a は過去分詞 *istanziato*、b は不定詞 *avere*) よりも前にあるという点で共通している。(8)にあげた構文は、現代イタリア語では非文法的な(5)に相当することに注意されたい。<sup>1)</sup> 古イタリア語においては、動詞の定形と非定形のあいだというこの主語の位置は、なにも全体疑問文に限られたものではない。部分疑問文にも共通している。

(9) a. Ove siemo *noi* arrivati? (T, p. 104 = LVII)

b. Idio onnipotente, perché mi facesti *tu* venire in questo misero mondo [...]? (V, p. 741 = I)

ただし、全体疑問文、部分疑問文を問わず、主語がいつも表現されるとは限らない。次の(10)は、(9)bに続いて畳みかけられた疑問文である（主語の想定される位置は\_で示す）。

(10) Perché non mi uccidesti \_ nel ventre della madre mia, o, incontanente [= appena] che nacqui, no mi desti \_ la morte? (V, p. 741 = I)

そこで、Munaro（出版予定、1.1.1 節）も参考にしながらこれまで見てきたことをまとめると、次のようになろう。古イタリア語の直接疑問文における主語は、これが名詞であれ代名詞であれ、動詞の定形のすぐ後（かつ非定形の前）に置かれるのを原則とする。<sup>2)</sup> したがって、全体疑問文では、動詞が文の先頭に来ることになる（例：(7), (8)）。一方、部分疑問文では、これに疑問詞を含む句が先行する（例：(9)）。したがって、主語がさらにこれらの前方に出ている(3)b と(6)a は、本来の疑問文に何らかの統語上の操作が加わって生じたものだと考えられる。<sup>3)</sup>

## 2. 古イタリア語の平叙文における主語の位置とその情報機能上の性格

疑問文から少し離れ、古イタリア語における平叙文による主節を見てみると、傾向としては、動詞の前に 1 要素を出す（いわゆる V2 の）文がその基本をなすと言える。したがって、前に出るのが主語以外の要素である場合などは、主語が定動詞のすぐ後に残ることになる。このような定動詞の後の主語は、テキスト中で息の長いテーマ<sup>4)</sup>を引き継ぎ、高い予見可能性をもっていることを特徴とする（Suzuki, 2009）。こうした特徴も、動詞が複合形をなしているときに特にはっきりする。

(11) Poi fu *Azzolino* preso in battaglia [...]. (N, p. 871 = LXXXIV)

(12) Al tempo di re Giovanni d'Acri fue ordinata [= istituita] *una campana* [...]. (N, p. 839 = LII)

斜体で示した主語は、いずれも定形に置かれた受動態の助動詞 fu(e)よりも後にあるが、そのすぐ後にありかつ非定形の過去分詞 preso に先行する(11)ではテーマであるのに対し、過去分詞 ordinata よりもさらに後に移っている(12)ではレーマの一翼を担っている。事実、(11)の *Azzolino* (= *Ezzelino da Romano*) は、1 説話内で重ねてのテーマづけの末に繰り返されたものである。一方、(12)の *una campana* は説話の出だしに置かれ、ここで初めて導入される。さらに、動詞が複合形ではないにしろ、(11)のように、定動詞のすぐ後にあってテーマの機能を果たす主語の例を見てみよう。

(13) a. Così sostiene *lo Grande Sire* sua gente. (M, p. 134 = XCVIII)

b. E dunqua s'io vegno a la battaglia ko' llui ed io lo vinco, sie acquisteroe *io* grande pregio [...]. (T, p. 34 = XV)

(13)a に斜体で示した主語 *lo Grande Sire* はフビライ・カーンを指すが、何節も前の話からこれがたびたびテーマに現れている。(13)b の主節中の斜体の *io* にしても、先行する従属節中に 2 度現れる *io* が示

すとおりに、継続したテーマとなっている。

ただし、現代イタリア語と同様に、すでにテーマに納まっている主語は必ずしも表現されなくてもよい。

(14) *s'i' potesse avere ko-llui pace, si la vorrei \_volontieri.* (T, p. 116 = LXIII)

この例に<sub>2</sub>で示した表現されていない *io* と、(13)b にその表現を斜体で示した *io* とを比較されたい。いずれにせよ、古イタリア語の平叙文においては、動詞の定形のすぐ後（かつ非定形の前）の主語が継続性の高いテーマとしての価値をもっていることは、(11)と(13)の例からも明らかであろう。

定動詞のすぐ後にあるこうした主語とは違って、古イタリア語の平叙文において、主節中の動詞の前にある要素は、それが（*si* に代表されるような）テキスト連結詞でない場合、主語であるかないかにかかわらず、予見可能性の高いテーマから予見不可能なフォーカス<sup>5)</sup>に至るまで、さまざまな情報機能上の価値をもち得る（Suzuki, 2009, pp. 291-293）。ここでは、主語を例にとってみよう。以下の例(15)-(17)では、いずれも斜体で示した *io* が主節の動詞の前に置かれている。

(15) *S'io avesse così bella cotta [= veste] com'ella, io sarei altresì sguardata com'ella [...].* (N, p. 822 = XXVI)

(15)の主節中の *io* は、(13)b や(14)の場合と同様に、同じ *io* を主語とする条件節に後続していることも手伝って、テキスト中でのテーマとしての継続性は十分に高いものである。だとすれば、(15)の斜体の *io* は、(13)b の定動詞のすぐ後の *io* や(14)に表されていない *io* と、予見可能性上それほど大差なさそうである。つまり、予見の容易な継続性の高いテーマだということである。

(16) *Io andrò alle nozze, e tu al morto.* (N, p. 862 = LXXV)

次に、(16)に斜体で示した 1 人称の *io* は、互いに等位に置かれた 2 人称の *tu* と同様、これをテーマに文が展開している。両者ともダイクシスを示す人称であり（Salvi & Vanelli, 2004, p. 323）、その意味では予見が容易なはずであるが、複合型のコントラスト（Suzuki, 2001）が指示上の複雑さを生み出している。すなわち、2つの指示物が候補として競合しあい、聞き手にとっては、誰が「婚礼に（*alle nozze*）」行き、誰が「葬儀に（*al morto*）」行くのか、予見できなくなっている。このように、予見可能性の低くなった(16)の *io*（や *tu*）のような要素は、動詞の前に置いて早めにテーマづけをする必要がある。

(17) –*Qual è il maestro di voi tre?* – *L'uno si trasse avanti, e disse: – Messere, io sono.* – (N, p. 817 = XXI)  
最後に、(17)の問答で、「お前たち 3 人のうちの頭領（*il maestro di voi tre*）」が誰かを尋ねられた答えとしての「私（*io*）」には、当然フォーカスが当たっている。もちろん、答えの予見も聞き手には不可能である。

古イタリア語の平叙文による主節において、動詞の前に出た要素は、(15)、(16)で見たようにテーマであったり、(17)で見たようにフォーカスであったりする。また、予見可能性という観点から見ると、(15)のように予見が容易である場合もあれば、(16)、(17)のようにそれが難しいか不可能な場合もある。

このように、古イタリア語の動詞の前の要素は、それが主語であれそれ以外の要素であれ、さまざまな情報機能上の価値をもつことが許される。それは、動詞の定形のすぐ後（かつ非定形の前）の主語に、予見可能性の高いテーマとしての機能しか許されていないのと好対照をなしている、とすることができるかもしれない。古イタリア語の平叙文の定動詞のすぐ後の主語は、継続性のある息の長いテーマでしかあり得ないのである。

### 3. 古イタリア語の疑問文における主語の位置とその情報機能上の性格

Poletto (1998, pp. 319-320)によれば、中世ロマンス諸語は、平叙文においても疑問文においても、類型論的に主語を定動詞のすぐ後に残すタイプに属していたというが、われわれは、さらに、このような主語が平叙文、疑問文ともに同じ位置にあると仮定し (Benincà 出版予定を参照)、この第3節では、問題の位置にある主語に加え、動詞の前に出た主語（を始めとする動詞の項や疑問詞）がそれぞれ疑問文中でいかなる情報機能をもつか、を検討してゆきたい。

3.1. われわれは、古イタリア語の(11), (13)の平叙文において、定動詞のすぐ後の主語が予見可能性の高い、継続性のある息の長いテーマであることを見た。古イタリア語の直接疑問文においても、それが息の長いテーマであってもよいことは容易に想像がつく。たとえば、次の例では、

- (18) Non à [= ha] Cinghi grande vergogna a dimandare mia figlia per moglie? Non sa *egli* ch'egli è mio uomo? (M, p. 76 = LXIV)

話し手が、「チングス・ハーン (Cinghi)」が自分の娘を娶りたがっていると聞いて、「奴はわが臣下だということ (ch'egli è mio uomo)」を忘れてしまったのか、と修辭的な問いかけをしているが、2番目の文の主節中に斜体で示した主語の *egli* は、定動詞のすぐ後にあつて、明らかに先行する話のテーマを受け継ぐものである。ところが、次の(19)の主語 *lo mio nemico* は、定動詞のすぐ後ろに残されているにもかかわらず、一時的なテーマであるに過ぎない。

- (19) O[r] è *lo nemico mio* sì amico di Dio, che però [= per questo] m'abbia vinto? (N, p. 830 = XXXVII)

事実、話し手にとっての「敵 (nemico)」は、(ここには引用していない) 先行文脈で何度か言及されてはいるものの、指示上に複雑さが生じており、(19)の文に至って初めてテーマに納まっている。

古イタリア語において、基本的に動詞で始まる（か、動詞の前が疑問詞に限られる）疑問文では、動詞を2番目の要素に数える (V2の) 傾向にある平叙文に比べると、主語が動詞の前に出る確率がぐっと減る。だとすれば、定動詞のすぐ後に残った主語が、平叙文の場合以上に幅広い情報機能上の性格を備えていたとしても不思議ではない。この種の主語が継続性のある息の長いテーマであるばかりでなく、一時的なテーマとして比較的予見可能性の乏しいものであってもよいゆえんであろう。

3.2. ここで、疑問文における動詞の前の要素の検討に移る前に、全体疑問文と部分疑問文のそれぞれがもつ語用論的な性格を見ておくことにしよう。

まず、全体疑問文は、その中立的な用法では、文をなす要素がそれぞれ予見可能ではあっても、それらの要素が組み合わさって表される状況や出来事の総体が話し手にとって不確かな場合に使われる (Givón, 2001, vol. 2, p. 293)。(20)の疑問文でも、目当ての「水筒 (barlione)」を言い当てる聞き手の能力の有無について、話し手の不確かさは文全体にわたっている。

(20) – Conosceresti tu tuo barlione [= borraccia]? – Sì, messere. – (N, p. 820 = XXIII)

しかし、文の1要素のみが不確かで、そこにフォーカスが当たる場合もある (Givón, 2001, vol. 2, pp. 293-294)。実際、次の(21)の最後のせりふは、その前のやり取りからも明らかなように、相手の女が誰かを殺そうとしたことを前提とし、その殺そうとした対象が尋問の当事者たる「私 (mee)」ではなく、斜体で示した「トリスタン (Tristano)」の方であることを確かめようとする疑問文である。

(21) – E dunque volevi tue uccider mee overo Tristano? – Ed ella disse ke no lo vollea fare, né mica uccidere lui [= l'interlocutore]. – E dunqua volei tu uccidere pur [= solamente] *Tristano*? – (T, p. 12 = III)

一方、部分疑問文は、典型的には、話し手が、聞き手がある状態や出来事に関する知識を共有していることを前提としながら、自分にその状態や出来事に関してまだ足りない点があると思うときに使われるものである。この足りない点が部分疑問文のフォーカス、残りがその前提である (Givón, 2001, vol. 2, p. 300)。例(22)後半の部分疑問文では、聞き手が正気を失ってしまったという出来事を前提とし、疑問詞 *quando* が「それを失った (l'hai perduto)」のがいつだったのかをフォーカスとして求めている。

(22) – Messere, io l'ho perduto. – E *quando* l'hai perduto? – (N, p. 817 = XX)

3.3. それでは、古イタリア語における疑問文中の動詞の前の要素は、どのような情報上の特徴をもつのであろうか。これも(15)-(17)で見た平叙文と同様に、予見可能性の高いテーマからその不可能なフォーカスまで、さまざまな情報機能をもつことができるのであろうか。以下、これを検討するにあたり、動詞の前に出た要素が(疑問詞の場合を除いて)動詞の項、それも特に主語である場合を中心に考察を進めることとし、たとえば、(21)の2つの疑問文中の *dunque/a* のような、項以外の要素は考察の対象から外すこととする。

すでに第1節で述べたように、古イタリア語の直接疑問文は、動詞が文の先頭に来るか(全体疑問)、それに疑問詞を含む句が先行するか(部分疑問)を基本とする。だとすれば、動詞の前に適宜1要素を配する平叙文に比べると、疑問文では動詞の前の要素のもつ情報機能上の性格がおのずと限定されてくることが予想される。疑問文のうちで、平叙文のように1つの要素が動詞の前に出せるとすれば、それは、第一義的には、疑問詞以外に考えられないからである。

疑問詞は、動詞の前に出るフォーカス要素に匹敵する。Paola Benincà (Benincà *et al.*, 2001, p. 150)によれば、現代イタリア語では、1文中にフォーカスが2つ以上あってはならないというが、これが古イタリア語にも当てはまりそうなことは、(22)の疑問文からも推察できる。<sup>6)</sup> ということは、ちょうど(17)の平叙文における斜体の *io* のように、動詞の前に出、かつ、そこにフォーカスが当たってい

る要素が疑問詞でないような疑問文があるとするならば、それは、全体疑問文に限られると考えられる。事実、(23)の最後のせりふ中で動詞の前に出た主語 *lo kavalieri da le due ispade* は、次に示す先行文脈からも明らかのように、フォーカス要素である。

- (23) – Cavaliere, *ki* à vinto lo torneamento [= torneio]? – E Tristano rispuose e disse a Brachina: – Non soe.  
– Ed ella disse: – *Lo kavalieri da le due ispade* à vinto lo torneamento? – (T, p. 56 = XXXII)

(23)の2つの疑問文は、ともに誰かが馬上試合に勝ったことを前提としており、疑問のフォーカスが最初は疑問詞の *ki* に、次いで名詞句の *lo kavalieri da le due ispade* に当たっているのがわかる。

疑問詞も含め、フォーカスが1文中に1要素しかあり得ないことはすでに見た。だとすると、次に再現する(3)bの *questo* のように、

- (24) *Questo che diletto vi rende?* (= (3)b)

疑問詞を飛び越してその前にさらにもう1つ別の要素が出ている場合、これがフォーカスであるとは考えられない。実際、*questo* がダイクシスにより指す焚きしめた香は、(24)の発話で初めて話し手がテーマに据え、その香が「いかなる楽しみをもたらすのか (*che diletto vi rende?*)」を問おうとするものである。そこに、テーマづけを急ぐ理由がある。同様の例をもう1つ先行文脈とともにあげておく。

- (25) – [...] Dimmi, se ti intendi delle virtù delle pietre [= gemme], qual ti sembra di più ricca valuta [= valore]? – Il greco avisò [= le osservò], e disse: – Messere, *voi* quale avete più cara? – (N, p. 800 = III)

ここでは、宝石の価値を聞かれたギリシア人が、逆に聞き手の意見を得ようと、斜体の *voi* をテーマに据え替えて疑問詞 *quale* の前に出している。テーマの交替は明らかである。

さて、古イタリア語の全体疑問文は、動詞で始まることを基本とする。したがって、(23)の最後のせりふでは、文中の1要素（ここでは主語）が統語上のある操作により動詞の前に出たものだと考えることができる。このような操作を受けて前に出た要素は、しかし、(23)の名詞句 *lo kavalieri da le due ispade* で見たようなフォーカスであるばかりとは限らない。テーマとしての機能を果たすこともある。ただし、(24), (25)で見た部分疑問文それぞれの主語 *questo* や *voi* と同様に、話し手がその場で導入しようとする新たなテーマであって、前から受け継いだ予見可能なテーマだとは言い難いように見える。

- (26) a. *quando i forestieri giungono a città, voi non [vi levate per] loro?* (N, p. 833 = XLI)

b. *Dunque la sua andata non dee offendere l'animo tuo? Certo no; e la rimasa [= l'esserci rimasto]? Molto meno.* (L, p. 172)

(26)aの全体疑問文における動詞の前の主語 *voi* は、客人の到来に対して聞き手は席を立たないのか、という修辭的な問いかけをもって、初めて客人に対する聞き手の「あなた (*voi*)」が対話部分でのテーマに据えられる。一方、(26)bは(例文(16)で見たと同じ)複合型のコントラストを形成している。「被告人の赴任 (*la sua andata*)」と「残留 (*la rimasa*)」の2つを候補としてあげ、これらが聞き手の「心証を害するはずがないではないか (*non dee offendere l'animo tuo?*)」と問いかけながら、2つの候

補を順次吟味している。両者の競合の結果、互いの予見可能性が乏しくなっていることは明白で、主語の *la sua andata* (や *la rimasa*) を動詞の前に置いてテーマづけを急ごうとする理由がそこにある。

これまで見てきたような予見可能性の低い要素のテーマづけは、そうした要素の分量が多く (*heavy*)、また、文の中心部から切り離されていると想定できるときに、いっそうはっきりする。

(27) *Chi vi desse Branguina, ke-ddono igli dareste voi?* (T, p. 134 = LXX)

(27)は、「ブレングウェインを引き渡す者 (*chi vi desse Branguina*)」をテーマに据え、「その者にはいかなる褒美をくれるのか (*ke-ddono igli dareste voi?*)」を尋ねている。この構文は、関係節で分量の多くなった要素が疑問文の前に出て、*hanging topic* による左方転位 (Suzuki, 2005, pp. 371-373) を構築している。つまり、左方に転位した要素 *chi vi desse Branguina* は — 文の中心部で同一指示の接語 (与格の *igli*) で繰り返されて、間接目的語であることがはっきりしているにもかかわらず — 間接目的語の標識たる前置詞の *a* を欠いており、その結果、主語と同じ形式をもつに至っている。この種の破格構文が「主格 (*nominativus*)」の名を負って、伝統的に *nominativus pendens* と呼ばれるゆえんである (Benincà *et al.*, 2001, p. 146)。 (27)では、このように操作された統語構造により、聞き手にとって予見の難しい要素を新たなテーマに打ち立てようとする話し手の意図がいっそう顕著に見て取れる。

## むすび

これまで、古イタリア語における直接疑問文中で、定動詞のすぐ後ろに残った主語と、逆に、その前に出た主語を中心に情報機能上の特徴を探ってきた。動詞の定形のすぐ後 (かつ非定形の前) の主語は、平叙文ではもっぱら先行文脈からの継続的なテーマである ((11), (13)) のに対し、疑問文では継続的なテーマから一時的なテーマに至るまで、ある程度の幅が認められた ((18) vs. (19))。一方、それと反比例するかのように、動詞の前に出た要素がテーマである場合は、平叙文ではその継続性に量的な幅がある ((15) vs. (16)) のに対し、疑問文ではその機能が新たなテーマへの交替に絞られることがわかった ((24)-(27))。フォーカスに目を転じると、部分疑問文では、疑問詞がフォーカスに匹敵する要素である。このような疑問詞にも似て、古イタリア語で動詞の前に出た要素は、平叙文中であるか全体疑問文中であるかを問わず、フォーカスの機能を果たす場合があるのも見てきた (平叙文: (17)、疑問文: (23))。

統語的な観点から見ると、古イタリア語の平叙文が動詞の前に 1 要素を出すこと (V2) を文の基本とするのに対し、疑問文は、動詞の前には疑問詞以外の要素を出さないことを基本とする。話をテーマという情報機能に絞って考察すると、もし平叙文が主語を定動詞の前に出さずにそのすぐ後ろに残したままであるのなら、それは特別な事情があつてのことだと考えられる。その特別な事情とは、主語が息の長い継続したテーマであるという点に存するであろう。逆に、疑問文が主語を定動詞のすぐ後ろに残さず、わざわざその前に出す場合にも、特別な事情が想定される。この場合は、まだ主語が



テーマに納まっていないので、そこに明確なテーマづけが必要になってくるという事情である。疑問文におけるこうしたテーマづけの必要性が、主語のみならず他の動詞の項にも生じ得るのは、例(27)を見るだけで十分だろう。実際、(27)で hanging topic によってテーマづけされた要素は、主語と同じ形式を呈してはいるものの、その文内部での統語上の役割はあくまでも間接目的語なのだから。

## 注

- 1) ただし、Elisabetta Fava の言うように、このような構文は、現代イタリア語においても、高尚な文体や定型の様式として必ずしも使われないわけではない (Fava *et al.*, 2001, p. 97. また、Serianni, 1991<sup>2</sup>, p. 521 も参照のこと)。
- 2) ただし、主語が人称代名詞以外の場合には、動詞の定形と非定形のあいだではなく、複合形をなした両者の後に置かれることもある。たとえば、(i)のように、関係節などにより分量が多くなった (heavy) 主語は、むしろ複合形の後に現れる方がふつうである。

(i) Unde è venuto questo sangue, k'èe kosie fresco? (T, p. 74 = XLIV)

一方、人称代名詞は、定動詞のすぐ後にとどまるばかりか、それに接語化する傾向さえ見せることがある (以上、Munaro 出版予定、1.1.1 節参照)。

(ii) Dimi, Tristano, uccidestue [= uccidesti tu] l'Amoroldo d'Irlanda a tradimento? (T, p. 64 = XXXVIII)

が、ここでは、人称代名詞とそれ以外の主語を分けて考える可能性が残されていることを指摘するにとどめておく。

- 3) なお、(6b) の小辞 *or* は、直接疑問文を導入するテキスト連結詞としての役割を果たすものである (Munaro, 出版予定、1.1.3 節)。こうした *or* は、(6b) のような全体疑問文だけでなく、部分疑問文を導入することもできる。

(i) Or che fece Iddio? (N, p. 804 = VI)

- 4) ここで言う「テーマ」とは、話し手が文のなかで何について述べるのかを言う部分のことである。これに対し、「レーマ」とは、テーマについて何を述べているのかを言う部分のことである。
- 5) ここで言う「フォーカス」とは、話し手が文のなかで話のピントを合わせようとする部分のことで、Lombardi Vallauri (1998) の言う narrow focus に相当する。対する broad focus は、ここでは「フォーカス」として扱わない。
- 6) 部分疑問文であっても、修辞疑問文の場合には、フォーカスが疑問詞以外の要素に当たることがある (Fava *et al.*, 2001, p. 116 の修辞疑問の指標 iii) を参照)。が、いずれにせよ、フォーカス要素は 1 つだけに絞られる。

(i) E que' dicea: – Perché battete voi *costoro*? – Rispondeano li maestri: – Per li falli tuoi. – E que' dicea: – Perché non battete voi *me*? ch'è mia la colpa. – (N, pp. 836-837 = XLVIII)

例(i)の最後のせりふでは、斜体で示した直接目的語の *me* が先行文脈中の *costoro* と単一型のコントラスト (Suzuki, 2001) をなしており、この *me* にフォーカスが当たっている。(i)の最後のせりふは (聞き手の反応がどうであれ) 修辞疑問文であり、話し手が聞き手に「なぜ (perché)」に対する答えを求めているとは言い難く、むしろ、下にあげた命令文になぞらえて、「そうではなく、私をたたけ (ma battete me)」と言っているに等しいと考えられる。

(ii) Non, uccidere l'innocenti, ma uccidi *me* cui è la colpa. (N, p. 804 = VI)

## 書誌

### ●使用テキスト

- L: Brunetto Latini, *Volgarizzamento dell'orazione "Pro Ligario"*, in *La prosa del Duecento*. A c. di C. Segre & M. Marti. Milano-Napoli, Ricciardi, 1959, pp. 171-184.
- M: Marco Polo, *Milione; Le divisament dou monde: il Milione nelle redazioni toscana e franco-italiana*. A c. di G Ronchi. Milano, Mondadori, 2005<sup>5</sup>.
- N: *Il "Novellino"*, in *La prosa del Duecento*. A c. di C. Segre & M. Marti. Milano-Napoli, Ricciardi, 1959, pp. 797-881.
- R: Brunetto Latini, *La rettorica*. Testo critico di F. Maggini. Firenze, Le Monnier, 1968.
- T: *Tristano Riccardiano (Italian literature, vol. II)*. Ed. by F. Regina Psaki. Cambridge, D.S. Brewer, 2006.
- V: Bono Giamboni, *Il libro de' vizi e delle virtudi*, in *La prosa del Duecento*. A c. di C. Segre & M. Marti. Milano-Napoli, Ricciardi, 1959, pp. 741-791.

### ●参考文献

- Benincà, P. (出版予定): "L'ordine delle parole e la struttura della frase", in Salvi & Renzi (出版予定), cap. 1.
- Benincà, P. *et al.* (2001): "L'ordine degli elementi della frase e le costruzioni marcate", in Renzi *et al.* (2001), vol. 1, pp.129-239.
- Fava, E. *et al.* (2001): "Tipi di frasi principali", in Renzi *et al.* (2001), vol. 3, pp.48-164.
- Givón, T. (2001): *Syntax: an introduction*, 2 voll. Amsterdam-Philadelphia, Benjamins.
- Lepschy, L. & G. Lepschy (1981): *La lingua italiana: storia, varietà dell'uso, grammatica*. Milano, Bompiani.
- Lombardi Vallauri, E. (1998): "Focus esteso, ristretto e contrastivo", in *Lingua e stile*, 33, 2, pp. 197-216.
- Munaro, N. (出版予定): "La frase interrogativa", in Salvi & Renzi (出版予定), cap. 29.
- Poletto, C. (1998): "L'inversione interrogativa come 'verbo secondo residuo': l'analisi sincronica proiettata nella diacronia", in P. Ramat & E. Roma (a c. di), *Sintassi storica (SLI 39)*. Roma, Bulzoni, pp. 311-327.
- Renzi, L. *et al.* (2001): (a c. di), *Grande grammatica italiana di consultazione*, 3 voll. Nuova ed. Bologna, Il Mulino.
- Salvi G. & L. Renzi (出版予定): (a c. di), *Grammatica dell'italiano antico*. Bologna, Il Mulino.
- Salvi, G. & L. Vanelli (2004): *Nuova grammatica italiana*. Bologna, Il Mulino.
- Serianni, L. (1991<sup>2</sup>): (con la collaborazione di A. Castelvechchi), *Grammatica italiana: italiano comune e lingua letteraria*. Torino, UTET.
- Suzuki, S. (2001): "I costituenti a sinistra e la contrastività in italiano antico e moderno", in *Archivio glottologico italiano*, 86, pp. 57-78.
- Suzuki, S. (2005): "Strutture italiane di 'reduplicazione clitica' in confronto a quelle romene", in *Studi di grammatica italiana*, 24, pp. 359-393.
- Suzuki, S. (2009): "Between thematicity and grammaticalisation: the diachronic rearrangement of information structure and the position of clitic pronouns in Italian", in L. Mereu (ed.), *Information structure and its interfaces*. Berlin-New York, Mouton de Gruyter, pp. 269-304.